

龍崎村では、江戸時代末期から明治中期にかけて、岩法寺村内にたくさんのため池をつくりました。しかし、そのためには、かわりの土地を岩法寺村と交換しなければなりません。今のあら池、三ツ池、こおり池などは、どれも岩法寺地内につくられた龍崎村のため池です。

次の資料を読み、あら池をつくり、その水路を修理し守るために、当時の龍崎村の人々がどんな苦勞をしてきたか、調べてみましょう。

エ あら池の工事のようす

(玉川村史)

江戸時代末期の龍崎村に、鈴木磯吉という人がいました。鈴木磯吉は、村の人々が水不足で苦しむのを見かねて、自分で山をほって水を通し、日照りの害をなくそうとしました。小林維光が、そのことを知り、大変感動しました。そして、さっそく藩主に工事を願い出て、代官が土地を検分することになりました。そして、ため池をつくる工事のために、玄米 100石と金 250両を出してもらえることになったのです。

こうして、元治元年(1864年)にあら池ができ上がり、龍崎村の田畑にはじめて水を引くことができました。

ところが、明治9年に、その水路がふさがってしまい、水が流れなくなり、稲はたちまちかれてしまいました。今度は県に願い出て、367円(現在の約715万円)の補助で、明治10年3月に工事が始まりました。その工事は、幅8間(14.4m)、下幅2間(3.6m)、高さ4丈6尺(13.8m)、延長81間(145.8m)という大がかりなものでした。この大変むずかしい工事は、ほとんど村の人たちの力で行われました。のべ2,870人というたくさんの人の努力によって6月18日にとうとう完成しました。

その後、明治22年に木の樋はほとんどくさってしまい、水路がまたふさがってしまいました。小林維光は、また県に願い出て、補助金300円(現在の約345万円)で木の樋を石管にかえる工事に取りかかり、やっと完成させました。

これらの3度に及ぶむずかしい工事に、村の人々は力を合わせて取り組んできたのです。